

天孫降臨と神武東征の検証

飯田 真理

【はじめに】記紀の神代の記述は、伝承の可能性もあるが、**中国などの文献や民間伝承**も取り入れられ、多くのことが付加されている。ホンの一部を示せば次のようなことである。

* **イザナミイザナギ神話**は、その類似がポリネシア、ミクロネシア、メラネシアに島々に分布する。中国南朝の「金桜子」との類似から**大林太良**は、この神話の源流を中国東南部と指摘している。



- * **黄泉国神話**も中国の「列異伝」や「搜神記」に類似し、「**黄泉**」という言葉も「春秋左氏伝」や「文選」からの借用である。
- * 国譲り神話のうち、「**アメノワカヒコの返し矢**」は旧訳聖書のニムロドが神の投げ返した矢で死んでことと同形である。
- * 天孫降臨神話における「**天からの降臨**」はアルタイ系遊牧民に広くみられる。中国の王権の根源は天にあるという天帝思想を取り入れている。（「**天之御中主神**」は中国の最高神（天帝）を借りて創作したものと考えられる。）よって、これらは史実ではなく、**神話の世界**と考えられる。
- ★ しかしながら、古事記における「**天照大神と素戔嗚尊**」以降や日本書紀における「神代下」は、史実を元にした伝承が含まれていると、筆者は考える。つまり、**高天原は北部九州**のことであり、その勢力が出雲を屈服させた後にヤマトへ東遷して、関東や東北南部までの倭人の国々を連合させたことであると推測している。記紀の神代下におけるニニギの降臨とそれに続く神武東征について、詳しく検証する。

第1章 ニニギ尊の降臨について

1. 大国主の国譲りまで

★ニニギ尊の降臨にいたるまでの、記述を要約しておく。(主に古事記より)

①伊邪那美（イザナミ）の死と黄泉の国

伊邪那美は火の神を産んだことで死んでしまう。悲しんだ伊邪那岐（イザナギ）は伊邪那美を、出雲国と伯耆国との堺の比婆の山に埋葬する。

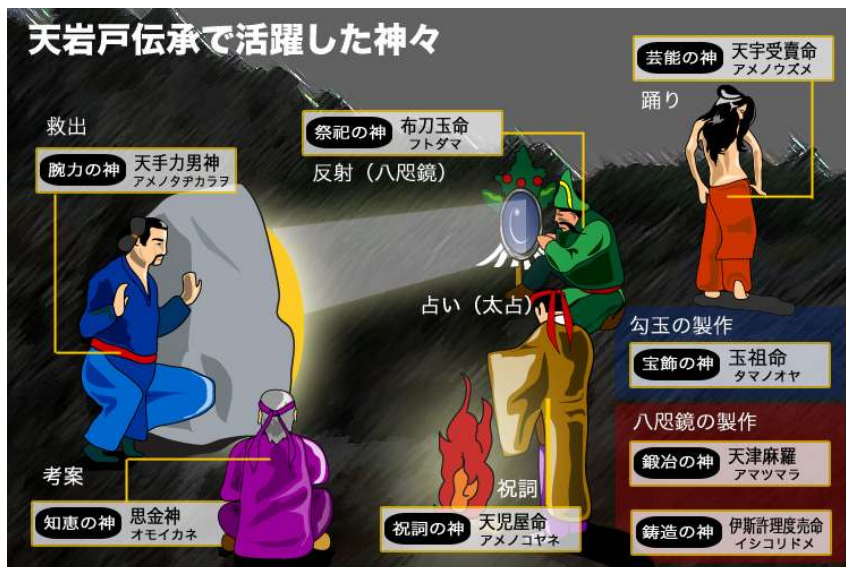
②イザナギが黄泉の国から帰る。伊邪那岐は筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原（アワギハラ）に行き、禊（ミソギ）をする。

《後に詳しく述べるが、筑紫の日向は宮崎の日向ではなく、
玄界灘沿岸、または単なる日に向かう土地という意味であろう。》

③天岩戸事件

*天照大神と須佐之男命が高天原で天照大神と誓約をする。須佐之男命が狼藉を働いた結果、**天照大神が天岩戸に籠もる。天岩戸事件が解決した後**に、須佐之男命が出雲に降り、ヤマタノオロチを退治する。

《天岩戸事件は、卑弥呼の死と男王の追放およびトヨが女王として共立された史実が伝承されて神話化されたものである。
これについては次号で詳しく述べる。》



★須佐之男命は、クシナダ媛や大山津見の娘との間に様々な神が生まれる。

大国主（大己貴命）は須佐之男命の六世の孫とされる。ところが、後の大国主の物語には、**須佐之男命の娘の須勢理媛が大国主の嫡后**とされる。



《**大国主（大己貴命）**とは、**特別の個人ではなく出雲の首長**のことと考えられる。また須佐之男命の六世孫が大国主とういうことだが、これは後世の創作の可能性が高い。須佐之男命は高天原を追放された人物であり、**大国主が須佐之男命の六世孫とすることは、出雲の首長は元々高天原の子孫であり、国譲りを正当化するために創作されたのであろう。**また、原伝承は、**大国主が素戔嗚の娘の須勢理媛と結婚した**ということであったと、筆者は考える。》

④その次に大国主を中心とする**出雲神話**が多く記される。

- * 因幡の素ウサギ
- * 八十神の迫害
- * 根の国訪問
- * 沼河比売求婚、
- * 少名毘古那神との国作り
- * 大年神の神裔

⑤ニニギが降臨するに至る経緯

* 天照大御神から命じられて、**正勝吾勝勝速日天忍穗耳命**が降臨することになった。しかし、天忍穗耳命は「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国がひどく騒がしい」と言って引返して、高天原に戻る。

* 天照大神は相談して、**天菩比神**を派遣することになる。天菩比神は派遣されたが大国主神に媚びへつらって、三年経っても高天原に経緯を報告しなかった。そこで、高御産巢日神と天照大御神は、そこで、**天若日子**を派遣させた。天若日子は、大国主の娘の**下照姫**と結婚して使命を忘れ、ついには高天原の高木神に返し矢で殺されてしまう。

《この返し矢物語は、旧約聖書などの神話に多く見られることとである。》

* 次に、天尾羽張神の子『**建御雷神**』に **天鳥船神**を添えて、派遣する。天鳥船神と建御雷神の二柱は、出雲の**伊那佐**（イザサ・イナサ＝稲佐の浜）の浜に降り立つ。）

* （八重言代主神と建御名方の話の後）大国主は国譲りをする。建御雷神は高天原に上り、葦原中国を平定した経緯を報告した。

《日本書紀ではこの場面に主に活躍するのが**経津主神**で、**建御雷神**（武甕槌神）が脇役となっている。『古事記』では経津主神の事にはふれていないが、建御雷神が神武天皇に授けた**剣・布都御魂**が出てくる。『出雲国造神賀詞』や『出雲国風土記』にも**布都怒志命**（経津主神）が登場する一方、建御雷神は見られない。経津主神は物部氏の神であり、建御雷神は藤原氏が祀る神である。このため、国譲り神話の原形には経津主神が主役として登場していたという説がある。いずれにしても、大国主の国譲りは、出雲が高天原勢力邪馬台国後継勢力に攻められて敗北したということであると推測できる。》

2. ニニギ尊の降臨の考察

(1) 天照大神と高木神による降臨命令

★天照大御神と高木神が、太子である**正勝吾勝勝速日天忍穗耳命**に「葦原中国を平定したので、地上に降りて統治しなさい」と命ずる。

★ところが、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命は答えた。「わたしが地上に降りようと身支度をしていたら、子供が生まれました。名前は**天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命**（アメニキシクニニキシアマツヒコヒコホノニニギ命）です。この子を地上に使わずと良いでしょう。」

天忍穗耳命が高木神の娘の**万幡豊秋津師比売命**と結ばれて生まれたのが**天火明命**、次に**日子番能邇邇芸命**（ヒコホノニニギノミコト）だった。そこで、日子番能邇邇芸命に地上に降り立つように、と命ずる。



★そして、ニニギ尊の降臨と日向神話が記されている、古事記にはおよそ以下の記事が順に記されている。（一部省略）

(i) 天照大御神の孫であるニニギ尊への降臨命令

- (ii) 天の八衢でのサルタヒコの登場・三種の神器を授ける。
- (iii) 登由宇気神などの神々の移動の記事およびニニギ尊が五伴緒と共に移動する。
- (iv) 筑紫の日向の高千穂の久士布流多気に降臨する
- (v) 笠沙御崎で木花佐久夜毘売と出会い・石長比売と天皇の寿命の説話
- (vi) 火中出産による三貴公子（火照命・火須勢理命・火遠理命）の誕生
- (vii) 海幸山幸説話

(2) 筑紫の日向の高千穂の久士布流多気について

ニニギ命は天の石位（高天原で座っていた場所）を離れて、天の八重多那雲（空の幾重にもたなびく雲）を押し分けて、その激しい神の力で道を掻き分け、天浮橋から浮島に降り立ち、筑紫の日向の高千穂の久士布流多気に降臨した。

（日本書紀本文：日向の襲高千穂峯に降り立った。

一書第一：筑紫の日向のくしふるの峯

一書第二：日向のくしひの高千穂の峯

一書第六：降りる処を日向の襲の高千穂の添山

① 「筑紫の日向」は南九州なのか？

★『古事記』の国産み神話において日向の記載はない5、6世紀の九州は、筑紫国・豊国・肥国・熊曾国の四区分に観念されていた。日向国が成立したのは7世紀中期以降である。「筑紫の日向」とは南九州のことを想定していることは明らかだが、日向という降臨の地名が古くから伝承されていたなら、日向とは九州の宮崎の日向ではなく、原日向は太陽が向かうという程度の意味であったとも考えられる。

★高千穂についても稲が高く育ち稔るさまを表すだけで、特定の地名ではないとも考えられる。さらに、久士布流多気（クシフルタケ）は明らかに金官伽耶の首露王が降り立ったとされる亀旨（クジ）峯からの借用である。大分県にはこの「亀旨峰(クシフル)」が訛ったと思われる「九重山系」と「久住山」があります添山の添（ソフリ）も韓半島のソウル（みやこ）からの借用である。

② 木花佐久夜毘売との出会った笠沙の御前

★筑紫の日向の高千穂に降臨した後、天宇受売命と猿田毘古大神などの詳細な説話の後に、ニニギ命は、笠沙御崎で木花佐久夜毘売と出会う

*ニニギは言った「この土地は、韓国に対峙していて、笠沙の御前にまっすぐに通り、朝日がしっかりと注ぐ国で、夕日が照らす国である。」ニニギ命は底津石根に太い柱を立て、空にそびえるほどに壮大な宮殿を建てて住んだ。

*天津日高日子番能邇邇芸命は笠沙御崎（日本書紀：吾田の長屋の笠狭の岬）で美しい少

女に出会った。少女は「大山津見神（オオヤマツミノカミ）の娘の **神阿多都比売**（カムアタツヒメ）、別名を木花佐久夜毘売（コノハナサクヤヒメ）といます」と答えた。

★笠沙は現在の薩摩半島の南さつま市あたりを指すと考えられている。

しかし旧笠沙村の誕生は大正11年（1922年）で、その前はここは片浦村と呼ばれていて、この一帯に「笠沙」という地名は、字名としても存在しなかった。記紀では、ニニギノミコトが笠沙の御前で大山津見神（オオヤマツミノカミ）の娘で神阿多都姫（カミアタツヒメ）、またの名を木花開耶姫（コノハナノサクヤヒメ）と出会う。そしてこの姫と結婚して三人の貴公子が誕生したことになる。

*問題は「**韓国に対峙して**いて、**笠沙の御前にまっすぐに通り朝日がしっかりと注ぐ**国で、**夕日が照らす**国である。ここは**とても良い土地だ**」との記述である。



★筆者は前の①項において、日向、高千穂、は特定の地のことではなかった可能性を述べた。糸島市には日向峠が、室見川の支流に日向川がある。朝日をさえぎる山がなく朝日の直刺す國に合致する。その糸島市には「笠掛池」と「笠掛」の地名もある、「笠沙」とは、この「笠掛」のこととの説も浮上する。上田正昭氏も、高千穂が宮崎県で、笠沙の御崎が鹿児島県薩摩半島なら「韓国に向かう」地域とはなり得ないので、「本来の高千穂峰の原伝承は、韓国に向かう北九州の地域であったとみるべきではないか」と主張する。（上田正昭・日本の神話を考える・小学館・1991）。よって、日向・高千穂と同様に笠沙の御前も原伝承は**玄界灘沿岸**であったのである。

★筆者は、記紀の編纂のとき、隼人の服属の物語を記紀に挿入ことにより、降臨の地を南九州（筑紫の日向）と改変したが、「此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の

直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地」との記事が古事記では残ってしまったと推測する。

(3) 神阿多都比売(別名木花佐久夜毘売)と

山幸彦(別名天津日高日子穗穗手見命)

★ニニギ命の妻の神阿多都比売(別名木花佐久夜毘売)は大山津見神の娘と記す。同じ大山津見神の娘に出雲のスサノオの正妻のクシナダヒメがいる。さらにスサノオの子の八島士奴美神(ヤシマジヌミノカミ)の妻のコノハナチルヒメも大山津見神の娘である。大山津見神は天孫ニニギ命の妻としてもコノハナサクヤヒメ(カムアタツヒメ)を送り込こんだことになっている。

出雲王朝の始祖の嫁も天皇家の最初の嫁も大山津見神の娘ということになっているのは何を意味しているか不明であるが、この後に石長比売の物語により天皇の命が短くなったとする説話が記されている。コノハナサクヤヒメとは、その説話に合わせるための「繁栄と短命」の意味を持たせるものであると考えられる。天皇の命が短くなったとの説話を記しておく。

大山津見神は、木花佐久夜毘売に姉の石長比売を添え、百取の机代の物を持たせて差し出した。姉の石長比売はひどく醜かったので、ニニギ命はその姿を見て恐れて、送り返してしまった。それで妹の木花佐久夜毘売だけを残して一晚の契りを結んだ。大山津見神は「わたしが娘を二人並べて送ったのは、石長比売が仕えれば天津神の皇子(ニニギ命)は雪が降り風が吹いても、岩のように永遠に固く動かず変わらないものになるでしょう。木花佐久夜毘売が仕えれば木の花が咲くように繁栄するでしょう。」と誓約をした。しかしこのように石長比売を送り返し木花佐久夜毘売を留めたことで天津神の皇子(ニニギ)の寿命は木の花のように儂いものとなるでしょう」と語った。これ以降、天皇の寿命は長くは無くなってしまった。

(これはバナナ型神話で、東南アジアやニューギニアを中心に各地に見られる。

死や短命にまつわる起源神話である。)

★木花佐久夜毘売の本名は神阿多都比売であり、阿多隼人の姫という意味である。薩摩の阿多は極めて僻地であり高千穂からは距離が遠い。そのようなところにニニギが行くことも大山津見神の娘がいることも不可解である。この後に記される海幸山幸神話におけるホオリ命(山幸彦)も同様である。ホオリ命の別名として天津日高日子穗穗手見命(日本書紀では彦火火出見)と記す。古事記において別名が記されている人物がそれなりに存在する。別名が元の名称であったことがほぼ定説になっている。ということは、ニニギ妃の元の名は(大山津見神の娘の)木花佐久夜毘売であったが、隼人と結びつけるため、阿多隼人の姫が付加されてそれが本名となり、元の木花佐久夜毘売が別名として記されたということである。

- ★皇孫ニニギ命の子の後継者についても、天津日子番能邇邇芸命から天津日高日子穗穗手見へと
いう系譜を、火中出産と海幸山幸説話に結びつけて、隼人族の皇孫への屈服の物語として作り
上げたと考えられる。山幸（ホオリ命）を皇孫としたが、天津日高日子穗穗手見命が元の名と
して記されたのであろう。
- ★以上検証したように、火中出産説話や海幸山幸説話などの隼人族につながる説話が皇孫系譜に
挿入されることにより、降臨の地やニニギの妃の出身地が玄界灘沿岸から南九州に改変された
のである。奈良時代において、隼人は東北地方の蝦夷とは異なり兵部省の被官、隼人司に属し
王権の重要な役職についている。その隼人を懐柔して服従させるために、隼人が天皇家と血縁
があり服属したとの物語を記紀に挿入したと考えられる。
- ★ニニギ命と山幸（ホオリ命）の別名のヒコホホデミは神武天皇の別名でもある。海幸山幸説話
は到底真実とは思われないので、山幸彦の子とされる天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命は実
在しない。よって、東征した神武天皇はニニギ命の子のヒコホホデミであったと考えられる。
天照大神からの元の皇孫の系譜は、全て穀物に関する、《ホシホミミ、ヒコホニニギ、ホア
カリ・ニギハヤヒ。ヒコホホデミ》であったと考えられる。

(4) 隼人とヤマト王権の関係

- ★以上述べたことには一抹の疑問が残った。それは、隼人の皇孫への屈服の物語が、なぜ、ニニ
ギの降臨や神武東征の前に挿入されたのかということである。記紀の他の時代、たとえば欠史
八代の天皇や景行天皇・ヤマトタケル、神功皇后物語に挿入してもよかったのではないか。筆
者はその理由としては、実際に隼人族が神武東征に関係していたと推測する。

【根拠①】 神武の一行が熊野から大和に入ったとき、吉野川の河尻での出会いの記事がある。

「八咫鳥の後より幸行せば、吉野河の河尻に到りましし時、筥を作りて魚を取る人あり。こ
こに天つ神の御子、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は贅持之子と謂ふ」と答
へ白しき。こは阿陀の鵜養の祖なり。」（日本書紀にも「梁を作つて魚を取る者有り、天皇
これを問ふ。対へて曰く、臣はこれ苞苴擔の子と、此れ即ち阿太の養鵜部の始祖なり」と

- ★元龍谷大学の平林章仁氏によればこの「贅持之子（阿陀の鵜養の祖）」は隼人であるとのこと
である。王権の成立当初から贅持之子が神武と同行していたことにはならないが、南九州から
既に住み着いていて、神武一行に食料を提供したとも考えられる。

- ★奈良県五條市原町に式内社の阿陀比賣神社がある。

『新撰姓氏録』大和国宇智郡に見える「阿陀郷」とは当地一帯と推定される。南九州の「阿多隼
人」と呼ばれたが当地に移住し、彼らの信仰する神を祀ったのが当社だと考えられている。
阿多隼人が畿内の内陸である当地に移住した経緯は不明だが、彼らについては記紀の神武東征

の段に既に見えており、極めて古くから当地に居住したことが推測される。

* (web サイト : 「神社遊録」より抜粋)

『和名抄』の大和国宇智郡阿陀郷の名が見える。当社の鎮座地である。また『和名抄』に、薩摩国阿多郡阿多郷の名が見える。阿多隼人の居住地である。阿多隼人は少数派だが名門で『記紀』では皇室に妃を出している。当神社の祭神の阿陀比賣神とは神阿多都比売、または木花佐久夜姫命と言い、まさに皇室の祖先の母親とされている。吉野川は南方漁法の鵜飼が行われていた地域であり、薩摩から移住の者が地名、魚法、祭神を持ち込んだものと見て差し支えはなさそうだ。「日本の地名」(谷川健一著)には鵜のことを沖縄では「アタック」と呼んでいたとの紹介が記載されている。

* (web サイト : 「神奈備によろこそ！」より抜粋)

豊玉毘売は鵜の羽で産屋を作ったことで、子の名を鵜葺草葺不合命(ウガヤフキアエズ命)という説話からも南九州で鵜飼が行われていたことになる。))

【根拠②】神武は、東征以前に日向吾田邑の吾平津媛を妃にしている。吾平津媛は吾田という語から阿多隼人である。筆者は神武＝崇神説をとる。(解説は省略) その崇神紀において、武埴安の乱が記されている。孝元天皇が河内の青玉の女である波邇夜須毘売を娶って生んだのが武埴安彦である。(なお、武埴安の地盤であった南山城は奈良時代には大隅隼人の居住地になる。) 武埴安彦の妻は阿多姫で隼人族である。母の河内青玉繫の娘というのも隼人族の女という説が有力である。以上の二つの根拠より、隼人族はヤマト王権が成立したときから王権に深く関係していたのは間違いないと考える。

【根拠③】

三番目の根拠としては、ニニギ命の降臨と神武東征に登場する大伴氏と久米氏の祖は隼人と関係が深いことである。大伴氏と久米氏は、隼人と関係深い氏族であり、神武東征において人族を率いていた可能性がある。

(5) 大伴氏と久米氏の原郷は熊本で狗奴国の末裔か

★古事記では次のように記す。

「(ニニギ命が降臨した後) 天忍日命と天津久米命の二人は、天の石鞞を負い、頭椎の大刀を身につけ、天の波士弓を持ち、天の真鹿兎矢を手に持ち、ニニギ命の前に立って仕えた。天忍日命は大伴連などの祖神、天津久米命此は久米直の祖神である。」

★古語拾遺(忌部氏の書)でも同様の記述がある。

「ニニギ命の降臨のとき、天児屋命と太玉命(忌部氏の祖)と天鈿女命を添えて、従わせた

後、大伴の遠祖の天忍日命が、来目部の遠祖の天穗津大来目を率いて、仗を帯刀させて、前駆をさせた。」

古語拾遺は忌部氏の書物なので、忌部氏に関する事差し引く必要があるが、大伴氏と久米氏に関してはある程度の信憑性がある。大伴氏と久米氏は軍事を担当してニニギ命に仕えたことになる。神武東征においても、大伴氏の祖の道臣命と久米氏の祖である大久米命が軍事を担当している。

★久米氏の発祥地として有力な説として、熊本県人吉地方（熊本県球磨郡多良木町久米）がある。和名抄に肥後国球磨郡久米郷がある。戦前の学者である喜田貞吉は「久米は玖磨にして、久米部は玖磨人、即ち肥人ならん。」と述べている。

★一方の大伴氏についてはどうであろうか。万葉集の大伴家持の歌には「大伴の遠つ神祖の其名をば大来目主とおひもちて」とあり、素直に採れば大伴氏と久米氏は同族、または大伴氏が久米部を統率している姿に重なる。久米氏の発祥地が熊本なら、久米氏と同族または統率していた大伴氏も発祥は熊本になる。日本書紀には、神武に同行した大伴氏の祖のはじめの名を日臣命と記す。（先導をつとめたので道臣という名をもらう）ひょっとしたら、この日臣命は「肥のくにの臣」だったかもしれない。

★筆者は大伴氏と久米氏は魏志倭人伝に記す**狗奴国の末裔**と考えていた。ところがすでに太田亮がその説を述べていたのである。

「久米」の項に、クメ また来目に作り、久味ともあり。なほクマとも通ずるが 如し。姓氏録に久米都彦を、一本に久末都彦に作り、又出雲風土記、意宇郡の久米社を、原註に久末とあるによりて知るべし。此等によれば、久米は、クマ、クミ、クメと通ずる語にして、喜田博士が、「久米は玖磨にして、久米部は玖磨人、即ち肥人ならん」と云はれし説に同意せざるを得ず。即ち久米部は南九州の大種族・肥人にして、**魏志東夷傳に狗奴國とあるが、此の久米部の本據ならんと考へらる**」と記す、（太田亮『姓氏家系大辞典』昭和 38 年 11 月初版(昭和 54 年八版)

★大伴氏と久米氏が狗奴国の末裔かどうか別にしても、原郷が熊本なら、隼人の地と接する地域なので大伴氏と隼人が関係していた可能性はきわめて高い。そのことは奈良時代の隼人の叛乱でもわかる。

「**大伴旅人は養老 4 年（720 年）、隼人の叛乱の報告を受け、征隼人持節大將軍に任命され反乱の鎮圧にあたる。**」

これは大伴氏の原郷が隼人と関係深い九州発祥の氏族だったからである。叛乱者のなかには大伴氏と関係する人々も存在して鎮圧しやすかったからであろう。継体天皇のときの磐井の乱を鎮圧した物部（鹿火）が北部九州の出身であったのと同様である。

よって狗奴国の末裔でなかったにしても、大伴氏も久米氏と同様に隼人の近接の熊本発祥の

氏族だったことほぼ間違いないと考える。

《この節のまとめ》

※ニニギの降臨のとき、**大伴氏と久米氏の祖がニニギ命と神武に仕えたこと**と、隼人神話が挿入されたこととは無関係とは思われない。ニニギの妃だけでなく、神武の東遷前の妃も隼人の女としている、日向神話における隼人の服従の物語が創作であったにしても、**隼人が神武東征前後に関係していた**ことを強く示唆する。さらに崇神記における隼人系の武埴安の乱からも、隼人がヤマト王権の成立に強く関係していたことを示唆する。

第2章 神武東征を検証する

★それでは、これから古事記の記述を元にして、神武東征の物語について検証していくことにする。

天津日高日子波限建鷦草葺不合命は、その叔母（母親の妹）の玉依毘売命（タマヨリヒメ命）を娶って、産んだ皇子の名前は**五瀬命**次に**稲氷命**、次に**御毛沼命**、次に**若御毛沼命**、別名を豊御毛沼命別名で**神倭伊波礼毘古命**である。御毛沼命は海を越えて常世の国へ渡った。稲氷命は母の国である海原に行った。

（日本書紀・即位前紀：神日本磐余彦天皇…諱は**彦火火出見**、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（ヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト）の第四子である。神代第十一段の第三の一書では第三子とし、第四の一書は第二子とする）

（1）神武四兄弟は創作か

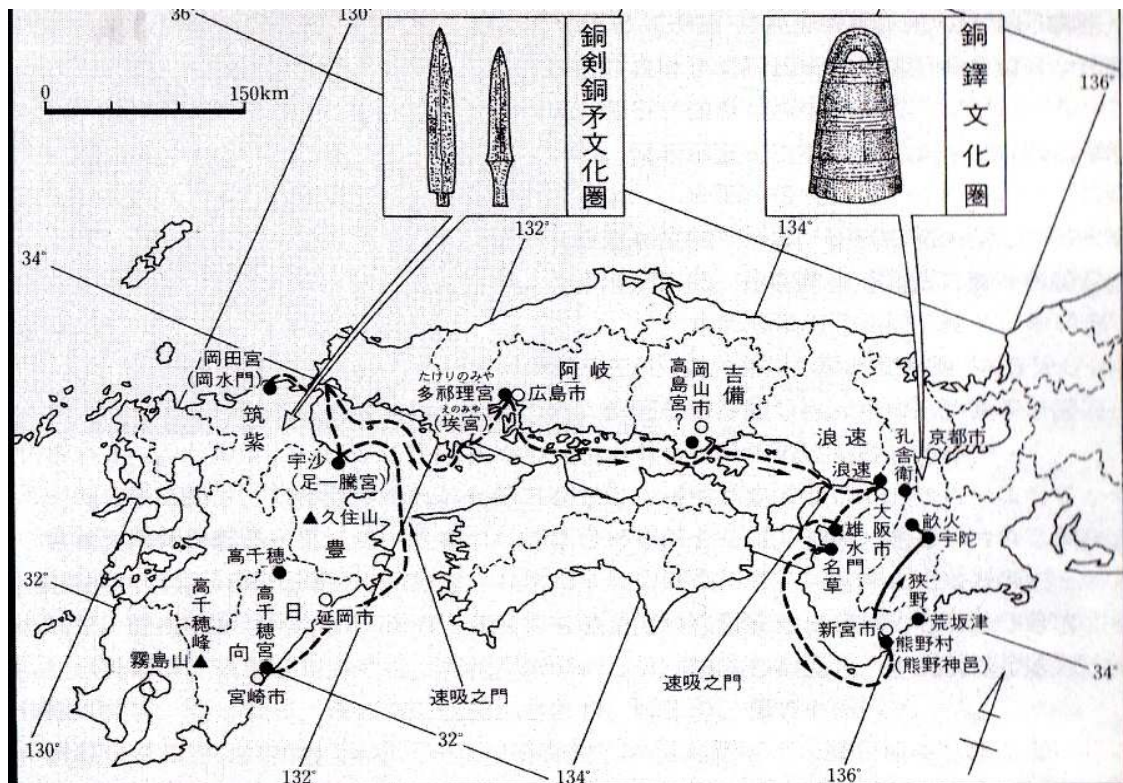
★四兄弟のうち、**稲氷命**と**御毛沼命**の二柱は常世の国と海原に行ってしまった。（日本書紀では神武東征の途中で海原と常世の国へ去る。長男の**五瀬命**は、白肩津で登美的那賀須泥毘古との戦いで矢傷を受け、紀国の男之水門で死ぬ。そのなかで**若御毛沼命**（神武天皇）だけが別名の「カムヤマトイワレビコ」が記される。日本書紀では「**彦火火出見**」という山幸彦（ホオリ命）と同じ名を持っている。

★**稲氷命**と**御毛沼命**は説話の人物であり、創作であることは間違いない。では**五瀬命**はどうか。筆者はこれまでは、五瀬命が矢傷を受けて紀国で死んだのは史実であると考えていた。しかし、その後、矢傷を受けただけで死んでしまうのは不可解であると思うようになった。紀の国以降の物語においては、五瀬命は存在せず神武が当初からリーダーだったような描き方になっている、さらに、もし本来のリーダーであったなら、神武と同様に妃や子のことが存在したはずだが、東征が完了し神武の即位と論功行賞まで**五瀬命関係者は全く記されていない**。（日本書紀では**五瀬命**の死を恨んでいる記述があるが、古事記では五瀬命の敵討ちを伺う記述は一切ない。）五瀬命が存在しなかったような記され方である。おそらく「日の御子であるのに日に向かって戦ったので敗北した。」ことの象徴として、五瀬命の死が挿入されたと推測する。東征

のリーダーは最初から**彦火火出見（神武）**であった、と考えられる。

(2) 神武東征の経路

★東征の経路は下図のようなものである。「**筑紫の岡田宮に一年、阿岐国の多祁理宮に七年、吉備の高島宮に八年**」やその他不可解なことがあるが、ここでは省略する。ただ、吉備の高島宮に八年との記事は、ヤマト王権の成立に吉備勢力が関与したことを暗示する。考古学的に、箸墓などの古墳に見られる**特殊器**台や纏向遺跡の**円弧文円板**は吉備系のものであるからである。



(3) 那賀須泥毘古との戦いと五瀬命の死

★第一節で五瀬命は非存在と述べたが、ただ、戦いのあったとする白肩津は東大阪市の日下（くさか）の近くである。東大阪市と生駒市をつなぐ**暗がり峠**がある。そこからは大阪平野を一望できる。**日下（くさか）**の少し上で現地勢力が待ち伏せして迎え撃ったなら、神武軍が敗北するのは間違いない。よって、東征軍が河内で現地勢力軍により迎え撃たれた可能性は残る。

(4) 熊野での苦難について

★東征軍は紀の国から熊野に着いて、そこで様々な苦難に会う。このとき、**高倉下**という人物が現れて、夢に天照大御神と高木神が登場する。そして**建御雷神**が「わたしが降りなくても、その国を平定した刀があれば、大丈夫です。この刀を下ろしましょう」と語る。夢から

覚めると**布都御魂**（横刀）が出現する。この熊野での苦難と到底真実とは思われない。苦難を乗り越えられたのは、天照大御神と高木神の高天原の権威を示すためであったと推測できる。また、**建御雷神**と**布都御魂**は出雲を屈服させた神（剣）である。飛鳥時代から奈良時代にかけて、ヤマト王権は東北の蝦夷への侵略を行っていた。その最前線であったのが常陸のクニである。その常陸の鹿嶋神宮の祭神は**建御雷神**、香取神宮の祭神は**布都御魂**である。建御雷神と布都御魂は王権にまつろわない異族を征服するシンボルである。この熊野での建御雷神と布都御魂の登場はヤマトを征服することの象徴として挿入されたと考えられる。

★そして、力を回復した東征軍は熊野から**八咫鳥の道案内**によりヤマトへ向かったことになっている。しかしながら、熊野からヤマトへの行程は至難のことで真実とは思われない。河内に着いたとき、ヤマトへの龍田越えが険しいので引き返しているが、それとは比較にならない険しいルートであり、行軍できるはずがない。和歌山から大和に行くには紀の川をさかのぼるほうがベストのルートである。実際、**大和に入った最初は吉野川の河尻**になっている。（日本書紀では最初に宇陀に到着している。）おそらく神武東征の原伝承は紀の川をさかのぼったことであったと考えられる。

(5) ヤマトでの戦いの創作性

★宇陀での戦いからはじまって、登美毘古（那賀須泥毘古）を倒すまで、様々な敵との戦いが記されている。以下に要約する。

① 宇陀での戦い

大伴連等の祖道臣命・久米直等の祖大久米命の策略により、兄宇迦斯は自分がつくった罠に逆にかかってしまい、切り殺される。・弟宇迦斯は恭順する。（宇陀の水取りの祖）

② 忍坂（宇陀の西、現在の桜井市忍坂）の大室でだまし討ちで土雲八十建を殺す。

*久米歌「忍坂の 大室屋に 人多に 来入り居り 人多に 入り居りとも みつみつし 久米の子が 頭椎い 石椎いもち 撃ちてし止まむ みつみつし 久米の子等が 頭椎い 石いもち 今撃たば宜らし。かく歌ひて、刀を抜きて、一時に打ち殺しき。」

③ 登美毘古を撃つ

そのときの久米歌：

「みつみつし 久米の子等が 粟生には 臭葦一本 そねが本 そね芽繋ぎて 撃ちてし止まむ。」

「みつみつし 久米の子等が 垣下に 植ゑし椒 口ひひく 吾は忘れじ 撃ちてし止まむ」

「神風の伊勢の海の 生石に 這ひもとほろふ 細螺の い這ひもとほり 撃ちてし止まむ」

④兄師木、弟師木を撃つ

そのとき、神武軍がつかれたときの歌：

「楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ 島つ鳥
鵜養が伴 今助けに来ね」

(日本書紀では、兄師木、弟師木との戦いの後で、ナガスネヒコとの戦いになっている。

ということは、古事記では登美は現生駒市ではなく、桜井市の押坂と磯城の中間の地になる。)

⑤邇芸速日命の帰順

「邇芸速日命は天津神の御子(=イワレビコのこと)が天降ったと聞きました。

そこで私(ニギハヤヒ)も天降って来ました」と言い、天津神の印である宝物をイワレビコに献上した。(日本書紀や先代旧事本紀では、邇芸速日命は神武東征以前にヤマトに天下ったことになっている。)

《考察》

- ★(日本書紀では、古事記に比べて多くの賊を討伐したことになっている。)しかし、このような大殺戮によりヤマトを支配できるとは到底考えられない。生き残った在地民は、恨みと復讐心で従うはずがない。ヤマト以外の各地の首長たちもヤマト王権に反発・警戒することになる。先代旧事本紀における饒速日命の東遷では、戦争をすることなく河内と大和に東遷したことになっている。記紀に記す戦い(大虐殺)は創作と考えられる。
- ★「神武東征」は「東北蝦夷の征服」とは性格が異なる。その目的は、高天原勢力が盟主となって九州から関東・東北南部までの**倭人の地域王国を連合させるため**であったと考える。実際、神武東征以降のヤマト王権は、大王(天皇)による絶対支配ではない。ヤマトや各地の豪族たちによる緩やかな連合政権である。筆者は高天原勢力とは北部九州勢であると考えている。高天原勢力がヤマトの現地勢力を従わさせて各地の地域王国を連合させるためには、現地勢力や地域王国にも連合のメリットがあることを示す必要があった。それは当時先進地域であった**北部九州勢力が掌握している朝鮮半島の鉄資源や先進技術**などを各地に流通させることであったと考えられる。それらは各地域とも絶対に欠くことができないものであり、各地の首長たちも北部九州勢力の主導に従わざるを得ないことになったのであろう。ヤマト王権の成立とは、列島に広く存在していた倭人の地域国家群が、北部九州勢力の主導の元で連合されたということであると、筆者は考える。各地の交流が促進されて、倭人連合全体が発展することとなったと推察できる。
- ★以上のことは、**前方後円墳**が九州から関東・東北南部までに短期間で広まった考古学的事実によっても補強される。現地勢力は**銅鐸祭祀**を捨てて、**神仙思想**を元にした宗教に改宗したのであろう。各地の首長たちが銅鐸祭祀を捨て、神仙思想(前方後円墳祀り)を受け入れたという

ことである。高天原勢力は平和的に倭人連合の盟主になったのである。

★ところで、不可解なことは、神武東征の物語は、ほとんどが軍事だけの物語になっていることである。同行したのも軍事を担当した道臣命（大伴氏の祖）と祖大久米命（久米直の祖）だけである。日本書紀にはニニギ命の降臨の前に「遠い所の国では・・村々はそれぞれ長があつて、境を設け相争っている。」と記し、当時の弥生社会を正しく表わしている。また、神武が東征の直前に「東に良い土地がある。青い山が取り巻いている。・・・そこに行って都をつくるに限る。」と語っている。東征の主目的はヤマトの地に王権をたてて倭人の国々をまとめることだった。王権をうちたてるには、ニニギ命の降臨の際には、天照大神はニニギ命に八尺の勾玉・鏡と草那芸剣を授けて、五伴緒をニニギ命に従わせている。五伴緒とは、天兒屋命（中臣連の祖）・布刀玉命（は忌部首の祖）・天宇受売命（猿女君の祖）・伊斯許理度売命（鏡作連の祖）・玉祖命（玉造部の祖）でいずれも祭祀関係の氏族の祖である。ところが、神武東征において、五伴緒は全く登場せず、尺の勾玉・鏡と草那芸剣も記されない。

★神武東征におけるヤマトでの征服戦争の記載は、当時の東北蝦夷に対する征服戦を反映して創作されたものと考えられる。多少の戦いがあつたことは否定出来ないが、実際は東征ではなく、東遷だつたと考えられる。ではなぜ軍事物語だけになつたのか。ヤマト王権の成立には隠さなければならなかつたことがあつたのである。それは神武東征に先立って東遷した饒速日命との関係である。

※次回は邪馬台国と饒速日の東遷について述べる。 了